

海外で流行する日本ポップカルチャー：文化交流と相互理解のプラットフォーム

アンドリュー・アプトン、名倉俊雄

「日本の漫画やアニメと、アメリカのスーパーヒーロー作品には根本的な違いがある。」こう語ったのはアメリカのコネル大学に通うアメリカ人の生徒だ。例えばナルトは目標の達成のために戦う。一方でアメリカのスーパーヒーローは超能力を有するが、本当の魂、野心的な精神が感じられないという。

プレイボーイなど数々の雑誌で活躍するライター、ローランドケルツ氏は海外での邦画人気を感じ取っている。ケルツ氏は、冷戦時代に世界が民主主義と共産主義、善と悪とのいわゆる二元構造を有していたことがアメリカの大衆文化のあり方と大きく関係していると考えている。社会情勢と対応するように、当時のコミックスや大衆文化はスーパーマンを始めとする善対悪の物語が多かったのだ。しかし、冷戦終結後、アメリカの感覚と価値観が大きく変わり始めたという。

「ソ連が崩壊し、唯一の超大国となったアメリカの行為には疑わしい面が現れ始めた。」そのような背景があり、90年代後半から21世紀の間に育った若者達は「世界の全てを善と悪にわけるとはできない」ことに気づき始めた。そのため、冷戦において白と黒がはっきりしないグレーな立場に立った日本が生み出すストーリーのほうに彼らの心をつかむようになったのだ。このような風潮が、ゴジラやドラゴンボールに代表される近年のハリウッドにおける日本アニメ作品の実写化ブームとして表れてきた。

それに対して、日本の制作者の立場を語るのは映画「るろうに剣心」の監督を務めた大友啓史氏である。日本の映画作りはわびさび、いわゆるそいでいくようなつくり方であると彼は言う。漫画の世界を人間がリアルに演じるためにシンプルな演出にし、過度な表現をカットするのだ。一方で、アメリカでは派手で「サービスしすぎる」作品が多いという。

大友監督によると、現代の日本の若者達にもっとも身近に感じる映画スタイルはわびさびの世界よりも、ハリウッドの派手でゲーム性のある世界だ。ハリウッドの映画スタイルが世界中を席卷しスタンダードになったことによって、日本人もいつしかハリウッド映画を観やすい映画とを感じるようになった。

「海外の人も変わってきている日本に影響されているように、日本人もやっぱりアメリカの文化に影響されてきていて、そういうバランスを考えて作らないとしぶい映画を作っ

も若い人観ては観てくれない。」

世界が相互に影響し合う環境を「メビウスの帯」とケルツ氏という。世界中で文化交流が活発になっている。海外での日本アニメや邦画人気は、人々が他国の文化を理解し尊重できる世界への入り口なのかもしれない。